

「トリックアート」の人類学——芸術としての錯覚、錯覚としての芸術

井川翔鷹哉

キーワード：錯覚、トリックアート、トロンプルイユ、芸術、エージェンシー

要旨

本論文では、「トリックアートとは何か」ということを、芸術人類学的な視点から徹底的に分析する。トリックアートは、芸術人類学がこれまで議論の中心としてきた「未開芸術」に対置され得るような「芸術のようなモノ」であり、これを分析することによって、「芸術」そのものを捉え直すことができる可能性を示唆したい。

第1章では、研究のきっかけや研究設問について述べる。上富良野トリックアート美術館での体験から、「芸術」に興味を持った経緯を説明し、本論文を芸術人類学の流れに位置づけたい。

第2章では、先行研究の流れについて紹介する。まずは「芸術」そのものの歴史を、アーサー・ダントーの芸術観とともに確認する。次に芸術人類学の流れを概観し、アルフレッド・ジェルによるエージェンシー理論について詳しく説明したい。

第3章では、用語の整理を行う。あいまいに重なり合う「錯覚」、「トリックアート」、「トロンプルイユ」などの用語を、狭義と広義に分けて解説していく。

第4章では、調査の概要について説明する。調査のために訪れたフィールドや、調査方法について簡単にまとめたい。

第5～8章では、実際に訪れたフィールドの様子を説明していく。上富良野トリックアート美術館、東京トリックアート迷宮館、横浜本牧絵画館、その他美術館での体験をまとめ、それぞれの章の終わりに、分析的な内容を挟みこむ。

第9章からは、本格的な分析の章に入る。まずは「作品」自体、トリックアートが持つエージェンシーについて分析する。トリックアートと人間の関わり合い、またトロンプルイユや現代芸術との比較などを通して、トリックアート自体が持つ独自のエージェンシーについて確認していく。

第10章では、「作品外」の様々な要素が「芸術」に与える影響から、「芸術」そのものを捉え直していく。ジェルの理論や錯覚の知識などを援用して、“錯覚的芸術解釈”を提示したい。

結論では、トリックアートを“錯覚的芸術解釈”と結びつけることにより、“二重の錯覚”として描き出す。これにより、現在の芸術における「絵画」と「人間」の距離感を問題化しつつ、今後の課題などを述べてまとめとする。